

氏 名	江角 知香
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第600号
学位授与年月日	令和4年4月6日
審 査 委 員	主査 教授 門田 球一
	副査 教授 浦野 健
	副査 准教授 中山 健太郎

論文審査の結果の要旨

p57の遺伝子産物は、核内に移行してサイクリン依存性キナーゼ阻害タンパク質として働くことが知られており、このことからがん抑制遺伝子の一つと考えられている。さらに、細胞質内においても多様な細胞機能に関係するといわれている。様々ながんで p57 発現と悪性度や予後との関連が検討されてきたが、卵巣がんにおいては一致した結果が得られていない。申請者はこの点に着目し、卵巣がんの中で、悪性度に差のみられる4つの代表的な組織型 [endometrioid (EC), serous (SC), mucinous (MC) and clear cell carcinoma (CCC)] の間で p57 発現に差があるのではないかと考え、県内の3施設から収集した92症例 (EC; 18例, SC; 31例, MC; 14例, CCC; 29例) について、p57 の免疫染色を行い、核と細胞質での発現を検討した。92症例のうち、p57 核陽性例が6例 (6.5 %)、細胞質陽性例が27例 (29.3 %) であった。組織型別に陽性症例の割合を比較したところ、核陽性例は CCC が有意に高く (CCC 17.2 % vs. non-CCC 1.6 %)、細胞質陽性例は EC で高かった (EC 55.6 % vs. non-EC 29.8 %)。これらは、患者の年齢、臨床ステージで調整しても有意であった。この結果をふまえ、申請者は、p57 の免疫染色は卵巣がんの組織型鑑別には有用とはいえないが、卵巣がん各組織型の生物学的特徴の解明の手がかりになるのではないかと結論を得た。本研究はこれまで卵巣がんを対象に行われた p57 発現研究の中で最も網羅的なものであり、今後、卵巣がんの発生病理の解明に有用な知見を提供していることから、学位授与に値する成果と考える。